WASEDA
HQ
1104
J74
Copr. 1892
no. 315

女學雜誌

第三百十五號
明治二十五年四月三十日發兌

侯爵サマーセット女史の
手記に成れるいとも可憐の

皐月姫

さま〴〵のこと思いだす櫻かな

長崎地方の迎春行に
天主敎徒の跡を尋ねし

小考古

下六番町六番地
女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 315. April 30th. 1892.

第三百十五號目次

EDITORIAL:—In Pursuit of Spring. (No. 6.)
MISCELLANEOUS:—"Satsukihime." (Summercets' manuals.) "Kaitsukenu" (Hisago.)
LITERATURE:—Rioka kōki. Elegy on the bag.
HOUSEHOLD SCIENCE:—How the girl students should practise their household science. (Sakurai Chika.)
NOVELS:—"Kurozukin" (No. 4.) (Jiuhachi koshi.)
CRITICAL NOTES:—On Reading "Abura Jigoku." (Tokoku.) How to write Japanese and Chinese Characters. The Teacher of all the generations. (Sangetsushi.)
THE FRIENDS OF THE ORPHANS:—
CORRESPONDENCES:—
CONCERNING WOMEN:—
NOTES AND NEWS:—
THE PRICE OF ARTICLES:—

● 迎春行
● 隨感　人物修養(山月子)
● 雜錄　皐月姬(侯爵サマーセット女史手記)○かいつけぬ(ひさご女)
● 文學　蓼花巷記○袋賛○弔不幸文
● 家政　女學生家政鍊習に就ての考案(櫻井ちか子)
● 小說　黑頭巾(第四回)(十八公子譯)
● 批評　油地獄を讀む(一)(透谷)○書法大意○萬世之師(山月子)
● 孤兒之友
● 通信
● 女報
● 物價

第廿三號目錄

女學生當號より大改良

細川夫人の人物……星野愼
春雨……秋野すゝき

漫筆
兼好法師……向陵
清女簾をかゝぐる圖に題す……伊藤貞子
箕子の妙所……すゝ政子
春のはじめ人の許に遣しける……土木子

詩歌の卷
博物の園……某學生
わが園
南洋の島影(其一)……畜拗生

文欄
常盤雪行の圖を見て感あり……筒井くに子
待花……中泉澄子
山水の圖に題す……見田功
春の聲……福原登利子
花信を聞く……大森みき子
婚姻箴……半仙女史

栞
唐詩撰講義
秘藏箱
雅樂多袋
古文庫
須磨の秋(源氏)
東山の春(謠曲)

右は去る廿一日發兌せり

雜誌 女學

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌 第三百十五號 明治二十五年四月三十日發兌

迎春行

（四十七） 鹿嶋鎔造館

嘗て青山延壽が大八洲遊記を讀み、其の鹿嶋中學校の記に至りて、心大ひに動きぬ。蓋し、封建の世、列藩各々學校あり中に就き、備前の岡山黌、熊本の時習館、水戸及び佐賀の弘道館の如き、群を拔きて秀名尋常ならざりしに、王政復古の后に至りて皆な亡びたり。然るに、鹿嶋の鎔造館は、舊新革命の間だに些少の影響を受けず、舊藩以降目今に至るまで、未曾て讀書の聲を絕たずと云ふ。他に類なきの美事にあらずや。又、鍋嶋直彬公の芳名を聞くや久し。昔しは、宗藩閑叟公の風を慕ひ、志を治政に傾むけ、思を文武の擴張に潛め、好く士に下り、廣く人を容る。去々年、國會開けてよりは、貴族院に入りて民に黨し、籍を其舊藩に轉じて、專ぱら地方團結の根礎を養成す。舊鹿嶋藩の地方、之が爲めに別乾坤の如しと言ふものあり。われ、少からぬ望を掛けて、此地方に入る。

（四十八） 三百年來舊情誼

三百年來の舊情誼は、俄かに一世を以て動かす可らず、舊藩君臣の交情は、なほ言ひ難きの味ひを存す、取分け賢明なる人の下に於ては、此の現象を呈すること極めて麗はし。夫れ、十九世紀の人民は、格式なき均頂平等をもて其念を安んずること能はず。必らずや相當の楷段を所望す。米洲合衆國の人、近ごろ切りに、門閥爵位を慕ふ。宗教界の人、日に日に、僧正監督の位を可とす。人は崇拜せんことを欲す、故に崇拜すべき偉人雄物に對して敬意を表し、格式を定めて此表意を寓せんことを要む。社會を平々凡々たる一平地とせず、所々、丘陵、峯嶺あらんことを欲するの情之による。たゞ肝要とする所ろは靈心に於て崇拜するに堪ゆるものにあらずば、位階を與へず、沐猴の爲めには其冠を剝ぐこと是れ也。若し夫れ、斯の如く、眞とに其價値あるものにして、其當然の位階を有たんには、之に禮し、之を崇むるは、人情眞誠の喜こび也。人は實に此類の崇拜を社會上に求むるもの也。思ふに、賢明の君上にありて、臣下之に仕ふと云ふは、たゞに政治上の一良法たるの

みならず、亦心理上の一良劑あり。國會制度必らずしも專一の美事にあらず、時ありてか、カーライルと共に偉大なる明君の支配を希望せずんばあらず。左れば、賢明能く人を愛するの舊君主にして其の元の藩に歸り、消しがたき情誼の信によりて、一地方の民心を集め、以て之を結び、以て之を和らぐることあらば、其益算へ盡しがたし。余は、單に直接有形の利益をのみ言はず、實に人心無形の上に至大の妙果あらんことを信ずる也。未だ大道を信ぜざる、地方輕薄の少年の思想も或は一變せん。長老を敬し、恩義を懷ふの美風も養成せらるべし。心、中心に合し、人氣一和し、相愛交信の德を伸張するの便りともなるべし。余は、異方面よりして、福澤翁年來の勸告に同意す。

（四十九）暴風の後

過月惣撰擧の折、佐賀縣下に於ける吏黨の運動は、あらん限りの惡方法を盡したり。而るに、舊鹿島藩内の主なる町村には、殆んど一歩をも踏止むこと能はざりき。此等の町村に於ては、人心一和し、命令一途に出で、感服すべき調和をもて運動したり。決して酒を飲まず、暴りに爭はず、尤とも公平なる手段によりて戰ひたり。故に、近鄉の選擧區民は、鹿島の人に對して恥かしと言ひ、勤勉したりと傳ふ。此人民平素至つて温厚にして、納税に未納者なきほどなりしが、吏黨の方、惡漢を使役し、良民の家に暴入して白刄を揮ふことありしより、人心大激し、老少共に得物を握りて打出でたり。然れども、選擧の結果意外の運びとなりし今日に至ては、巡査警部を惡むこと讎敵の如し。之が爲めに巡査は所々の番所に屯する能はず、大抵署内に引上げたり。郡役所も亦た同じ、目下終日閑として用務なきは、人民之に近づかざるに由る。多少吏黨に加擔したる敎師、及び如此き敎師多き小學校よりは、子弟續々退校すと。あゝ、温厚の人を駈つて激烈の人となす、爲政者の迂之よりも甚しきはなし。

（五十）學者優遇

直彬公、其の鄉の學事を思ふ切なるが故に、士を重んずること極めて厚し。不肖余の如きものも、其の遠來の客なるが故に之を待すること尤とも鄭重なりき。着后暫らくにして、物を賜ひ、勞をいたはる。續ひで親から駕を狂げて余が宿に臨み、學事を問ひ玉ふ。一夜、某學校に於て愚見を演述する時、公は

夫人と共に來聽せらる。夫人は聽衆の中に混じ、土板に胡座を敷きたる上に坐し玉ふ、人多くは知らず。余、公に席を讓る、公の云く、今夕は傍聽者なりと。士を待する如此し、坐ろに、古の烈公、閑窓公、及び芳烈公を回想せしむ。日野相公、賴山陽を招く、山陽容易すく到らず、嘗て其眞像の上に自から題すらく、此膝諸侯に屈せず、此脚未曾て朱頓の門を踵まずと。學者大抵此節あり、たゞ好く己を知る者の爲に屈す。然れども、學者(及び宗教家)は、當に眞誠方外の位に立つべし。人の師たらんことを勉むるが故に、時あつては何人の下にも屈み、亦何人の上にも伸びずんばあらず。政治上の有權者が之を待するや、當に一種例外の格に置くべき也。然るに、彼の俗輩相ひ議して位階を妄斷し、己れ無學無識にして而して學者の等級を品定し、之に學位を與へんとす。喩へば、匹夫が泥手を擧て帝王の頭上に冠を置くが如し、怪事何ものか及ばん。たゞ此怪事を奇しまず、揚々として其泥冠を戴だける學者こそ之に優る唯一の大怪物なれ。余は、我國に於て、文部省の官吏が、博士號を授與するの制度を好まざるもの也。余は三田に平民的一世の師表福澤先生あることを最と心地好く思ふもの也。

(五十一)旅中征人を送る

帝國議會開期近づく。貴族院議員たる鍋島直彬公、同じく原忠順氏と共に上京す。十八日その行くを送る。玄德曰く、請ふ亦た議するなかれ、朕が亮に於けるは、猶ほ魚の水に於けるが如しと。直彬公の原氏に於けるは、眞誠に水魚たるなり、其交情を見るもの誰か感泣せざらん。維新前、公は原氏を拔擢して老職となしぬ。維新后之を伴つて洋行し、亦之を伴つて沖繩縣に知事たり。中ごろ其舊藩地を憂ひ、原氏は辭して鄕に歸り、勸業、育英、團結の事に當る。公は一歲必らず一次歸鄕して之を助く、而して今や共に貴族院議員たり。開期は共に出京して同邸に住し、期終れば亦共に歸鄕して同里に居す。われ、之を百貫の渡頭に送るに、路邊の人、大率ね戶前、もしくは庭前に蹲踞し、學校書生は、いと幼なきに至る迄で、草鞋を穿ち、旗押立て、舊士族は、袴羽織凜然しくも居列びたり。渡頭に路盡き、余は此岸に立つ。征く人、水を渡り、彼岸を去らんとす。相ひ帆を振つて告別するとき、顧みれば、舊士肅然として頭を垂れたり。余は万感溢るゝ斗り

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

なりき。舊鹿島領に來りて、余は一種異樣の益を得たり。世人乞ふ刮目して、佐賀縣下藤津郡の將來を觀よ。原泉混々たり、他日將に飛瀑千丈の觀あらんとすらん。

（五十二）山及び老人

佐賀縣下に入りて、旅客の目に珍らしさは、山の頂に田畠あるヿと、集會に老人の出席するヿ多きヿと是れ也。識者日本の山の大抵遊び居るヿを歎く、而して老人の遊び勝なるを歎ずるヿ亦均し。然るに、文明早く入り、人口密に過ぎ、生計の費用高に上り、人事甚はだ活激となりたる西國の地方、例せば、此佐賀縣下の如きは、即はち、土地と人とを共に遊怠せしめ了はるヿなし。此に於てか、山に田畠あり、老人に活氣あり、これ、蓋し奥羽地方に於て決して見る可らざる所ろ、關東及び中國に於て稀に見る所ろのものあらん。

（五十三）謙堂主人を懷ふ

旅中、支を懷ふヿ切なり。取分け客舍に心友が得意の文章を讀み、孤燈明滅の下、其心臟の鼓動を聞けば、情思言ひ盡しがたきものある也。たま〳〵日本評論第四十一號を觀、植村兄が「人世の歸趣」と題する一篇を讀み、同じころ其愛孃の訃音に接す。怪巖の下に淸泉あるが如く、磊落眞率の下に、限りなき涙を包む吾友の爲に、深く同情を表す。嘗て其母を失へる頃ろ、或人の葬式に臨みて、君演ずらく、吾等が愛情斷つ可らず、切る可らず、滅す可らず、何如にすとも、然りとして信ず可らず、左るに何をもて吾等が愛する其目的の永遠に滅盡するヿを思ふを得んやと。君、母を失なひてより、いよ〳〵深く靈性の不滅を堅信せり。而して、今や亦た其愛孃を失ふ。君が情禁じがたきの歎きあると共に、君が靈消す可らざるの安慰あらん。「人世の歸趣」に云く、

愛とは何ぞ、永遠の契合を期するものにあらずや、死の狂颱は愛の金鏈を寸斷にしては到底之を繼續するを得ざらしむるものなる乎、果敢なき墳墓の上りに青々たる常春樹を植るは、蓋し人情の然らしむる所なり、祖先の靈を祭り、死に事ふること生けるものに對すると異なるものなからんとするは自然の情なり、天下普通の事實なり、人類が死を以て愛の終局と爲すに滿足せず、見へざるの世界に向ひて眼睛を注射して止まざるヿ斯の如し、吾人の天性は死后に至る迄で他を愛せんヿを期す、死者にして全く滅盡に歸す

るとせんか、果して然らば人性は己れに適するの境遇なくして組織せられたりと云はざる可らず、人の愛は空に向ふて活動し、烏有に向つて熱しつゝあるなり、天下の奇怪之より甚しきものある可らず。

近頃ろの文章に、此の如き文字を見ず、余は實に讀者に推薦せんとを欲す。

(五十四) ゼスイト教の跡

山口より、長府、馬關、福岡、佐賀を經て、肥前長崎に入らば、四百年前、フランシス、ザビエー師の一行が、點々血涙を落して斯教の種子を潤ほしたる跡形、みち〳〵に見聞せらる。誰か言ふ、日本人、宗教に淡泊なりと。家康生るゝの翌年、神洲初めて天國の種子を享く。而も、無文の英傑織田信長一夜本能寺に敗死する頃ほいは、巨木すでに滿地に根ざし、亭々として鬱乎たり蓁々たり。實に、國中最早數十万の信徒を得たりし也。可憐の孃に斷ち、万石の產を棄て、暫らくの間の榮華を、永遠の譽れに易へたるもの、或は、軍陣兩々相對するの時、たま〳〵安息日に至れば、敵味方相集まりて祈禱會を開き、翌る月曜日は一層の勇氣をもて相ひ戰るが如き、百世の下、聽くものをして感歎せしむるに足る。日本古來の戰史少なしとせず、左れど、奉教自由の大義を確守し、良心の明道に堅附して、正々堂々義の軍を起しつるものは、唯だ豈に島原の一戰にあらずや。道を信じて正しきに死するは大丈夫も尙ほ難しとす、左れど、匹夫匹婦にして能く大義に殉死したるもの數十万、皆な奉教の爲の義人なり。あゝ誰れか、日本國民を宗教に冷淡なるものと云ふ。佛教、儒教、ゼスイト教の東洋傳道歷史中、果して何處にか、我日本の如く好結果を獲たるの紀念ある。

(五十五) 畸陽の小考古

長崎に到りて留まると一日半、船の都合にて端なく亦た一日を延す。則はち、四百年來の傳道の舊跡如今果して何如んと案じて、一二の探窮を爲す。淺聞の旅客をして珍奇の念ひに切まらしめたる異談少なしとせず。請ふ、左に其幾分を記さん。蓋し、島原の亂に於て、最とも有力なる信徒は大方死せしなるべし。其后の迫害に於て、著しく目立たるものは亦大率ね殺されしなるべし。然れども、既に地下に潛みて全地に浸潤したる活水は、俄かに以て汲み干すべからず。他の無數

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

の天主教信徒は、依然樹の下に光を包みて隱に其信仰を守りたり。而して、聖經を用ひざるによりて、教理は父之を子に遺こし、子之を孫に傳ふ。既に教理の躰を失なひたるものも、「斯道に據らざれば救はれがたし」との信仰を語り傳へ、殆んど無衷の姿にて之を堅守するものありき。如此き信徒肥前一國に於て今尚ほ少なくも數万以上あるべし。其祈禱するや、ラテン語、イスパニア語、ホルトガル語などを用ゆ。祈るもの其意味を知らず、聞くもの、亦た之を解せず。例せば、キーレンス、キレーレンス、云々の如き、或る隨筆家は、九連環の字をあてゝ、之を支那人の歌となしけり。左れど、こは、吾主よ、吾神よ、吾が罪を赦し玉へ云々の祈禱文が稍や音を誤まりたるものなるや疑がひなし。現に平戸、五島を初めとし、長崎近郷及び大村の邊に至れば、一村に、お水方、お帳方の二人あり。お水方は即はち洗禮を授くるものにて、お帳方は聖暦をあづかるものなり。聖暦は之を竹の筒に入れ、年中折々の祈禱日、大祭日等を記す。お帳方よく之を記臆して村人の問ふに答ふるなり。平戸島民の如きは、お水方が洗禮を授くるに、中井の島より特更ら水を持來る。此島の水をサン、ジョアンの水と云ふ、盖しセント、ジョン、洗禮の約翰の水の義なるべし。もし佛事の爲めに、寺院に行くとあれば、歸宅の后ち、信徒相集まりて、御悔會を開く、罪を謝するの祈禱會なるべし。然るに、此等の信徒は、今の天主教を見て、多少自個の信ずるものに異なるとし、たとへば、ユダヤ人が基督の來りしのち、反つて之に背きたるが如く、今まに於て寧しろ天主教に歸せざるものあり。其社會に言ひ傳へあり。七代の后に至りて黒船來り、汝等を救はん、其時汝等は、キーレンス、キレーレンスの語を唱へて證しとすべしと。其の使用する暦にも亦た記して、こはたゞ七代の間の用に限るとなす。盖し、島原の亂后、先輩ひそかに將來を察して、七代二百十數年の后に至らば、外船渡來、天主教擴張の時節もあるべしと思ひて之に、教え置きたるならん。然るに既に港開け、天主教の僧侶自由に往來するの今日に至りては、彼等尚ほ多少の相違に心解せずして、更に后來の黒船を待つ、宛然ユダヤ人が尚ほ基督を今后に待つものに似たり。されど、ユダヤ人の頑迷によりて、舊約聖書の信を證すると均しく、今の肥前近在の舊信徒が頑迷なるによりて、四百年前來の遺傳

歴々として絶えざるとを認知すべし。左れど、すべての舊信徒皆な如斯くなりと云ふ可らず、現に歸して近頃の天主教に入りたるものも亦澤なり。元治、慶應の頃、羅馬法皇、日本に、ザビエー師の結果必らず存すべきとを信じ、何人をか遣はして再たび傳道せしめんとす。ペア、ジヨン、ロカイの二師、遂に之に應じ、日本に來る。來る前、三年琉球に上りて日本語を學び、而して后ち長崎に入る。當時、キリスタン禁制の高札所々に屹立し、人苟くも耶蘇の語を口にすべからず。二師あらゆる手段を盡して、舊信徒の跡形を探るに、漠として分明ならず。或時は、菓子を買ひて多くの子供に與ふ、其食ふ時に信徒の式を行ふともやあらんと思へばなり。又、或時は、馬に乘りて村落に入り、故ざと落ちて死せるまねす、人の來りて救ふとき、葬りに信徒の式を行ふともやあらんと思へばなり。左れど、久しうして一介の證跡を得ず、落膽失望してや〻念ひを絶たんとする時、或日、三四の田舍婦人大浦の天主會堂に來り、聖マリア聖子を抱くの畫を見、蹲踞して拜し、二師に謂つて「吾等が心は君方に同じ」と告ぐ、蓋し信仰を同うすとの義なり。二師さま〲の事を尋ね問ふに、十誡を知り、祈禱を原語にて覺え、肝要なる祭日斷食日を一々承知せり。二師驚喜して感謝す、其情察すべき也。之を問へば、この田舍婦人は、浦上山里村の住民なりと云、而して、其の村民は、殆んど悉皆同類の信徒なりと云へり。これ、浦上山里村に近世天主教僧侶の立入りたる階段なり。此に於てか、事發覺し、慶應三年、かの著名なる迫害起る。當時の長崎奉行、キリシタン信徒の大ひに蔓延せるを知り、先づ其中心たる浦上山里村の先輩七十名を捕縛す、(浦上本元の地謠あり)。然るに、村民之に尾して來り、吾も吾も信徒なりと告白す、其數算しがたし。櫻の馬場に迫害の具をとゝのえ、池を堀り氷責めの用意を爲し、主を言ひ顯はすものを酷逆して信仰を棄てしむ。過半は依然として信仰いよ〱堅固なりければ、遂に、此村の民一千餘人を、各藩に分送して其の牢に入れ、もしくは懲役に處す。或地にキリシタン草鞋など云へるものあるは、此時の懲役が仕事に成りぬ。浦上本元の尤とも熱信なる徒は、斯くして國外に追はれ、其他は大方、其地方の牢に囚わる。追はるゝもの、黒船に乘せられて海に航するに、過半船破れて沈溺す。則はち陸行せしむるに、多數の囚

徒なれば之を寺院に宿泊せしめざる可らず、然るに信徒は、寺院に宿泊することを肯んずるほどにてあらば、何とて斯く國外に追はれんやとて、皆な露を被ふて野外に眠る。其光景目のあたりに見る心地す。追放せられたる者、輕きは、明治三年、重きは明治五年に至りて歸鄕す。當時一物なし。爾來粗衣粗食して非尋常の勉强を爲しければ、廿餘年間に數多の富を積み、目下近鄕の村々にて選擧權あるものは、大方此の赦されて歸りたるものにてありとぞ。

われ、片々の報告を集めて、中に三四を拔き、以上の一文を草す。慷慨感激に堪へざるものあり。たヾ以上の有志に一事を告ぐ。凡そ、此等の遺跡は、日本宗敎思想の研究に於て一と方ならぬ好材料たらんとは言ふに及ばず、實に史學講修の上の大事件なり。諸君希はくは意を注ぎて細かに其事實を探窮搜索せよと。

春風や人聲うつる三笠山　（翁）

隨感

人物修養。

山月子

（一）讀むべきもの　讀むべきもの、豈書のみならんや、自らを讀むべし、人を讀むべし、天地を讀むべし。

（二）大なれ　吾人の憂ふる所は小なるにあり、目を擧げて天地の廣大なるを觀ん哉、吾人此天地を造れる神を信じ、之を愛し、之と一ならんと欲する者、乃ち天地の如き廣大なる心を持たざるべからず。

（三）完きを望め　自ら公平なりと信じ、正義なりと任ずる者、愛に乏しく、愛を說き、人情を唱ふる者、毅然、肅然の精神に乏し、今日の信者、偏僻の者多し、嗚呼是れ豈未だ深く基督を愛せざるが故にあらずや、基督は完全なり、剛く、優しく、大きく、小さく、悠然たり、靄然たり、毅然たり、肅然たり、眞と善と美と、其一身に在り、果して能く之を愛さば、吾人豈化せられざるの理ならんや、人々よ、岐路に彷徨すること勿れ、請ふ基督を觀よ、完きを望め。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

雜録

皐月姫

(Princess May.)

侯爵サマーセット女史手記

姫といふことばには今猶うるはしき古風の想像をともなふといふべし。されど十九世紀の蒸滊力われらを驅てひたすら現實の壺中に注ぎ、人の生涯に閑暇といふもののなき世とはなりにけり。われらの祖母は蘭麝に匂ふ黒髪を束ねはなのもすそを風にひるがへして花徑池塘のかなたこなたを逍遙し紅をつみ縁をきりて朝夕のながめとはなせしも、いかでわれらの生涯は空しく深殿の花にのみ對せむや。月日のために過さるるとはすぎしむかしのことなり。われらは花の園にあこがるるのたのしみをしらざるにあらず、されどわれらは一笠を肩にしてかりいれの畦道におもむかむとす。われらは雨に犁くの人とあるのみならず、つよき腕と利鎌とを用意して「人生」の田畠にとこしへの作物をゝさめむとす。このゆゑに今の世の姫といふことばより考ふれば古風のうるはしきところ其幾分を減じたりといふべし。かのハンス、アンダーセンの妖女か豆を床中に置くといひけむも實にまことの姫といふ程の身は優に妙なる「インチュイション」をもて未だ見ざるを覩、未だ聞かざるを聽き、身を翠帳紅閨のうちにをきて想を千里萬里の遠きに馳せざらむや。そも〳〵皐月の君といふは「テック」なるメリーの姫君にしてクイン、ビクトリアの親姻におはし後日女王の冠をいたゞくべき程ありて、實におさなき頃はあでやかにうしろに垂れたる髮を清風にひるがへし後苑に花をあつむる其姿など母君の得忘れぬ語り草なるべけれ。長じてたけたかくうつくしくして神姿「エンヂエル」の影にも通ひ、そのものがたりをあす樣の優婉なるこゝに天稟の感情性を示すものやといふべき。されど深院にうまれ給ひしに似ず、いたくこゝろを「人生」の實相にそゝがせたまい苦楚悲哀のこと〳〵に腸を斷たさせたまふ。母君の慈悲心ふかきも未だ姫君のなさけには及ばざるところありとかや。過ぬるとし小春の空の日和よきを見て母君は皐月の君をいざあはせ給ひわが「エストノア、カッスル」にきたらせたまひき。母君はわが机のうへなる詩句をとりあげて姫君にうちむかひ、

"Are they not beautiful?" といひたまひけるが、姫君が窓に倚りてこれを誦したまふそのかんばせは今猶わがまなこを去らずありけり。

"Let nothing make thee sad or fretful,
Or too regretful;
Be still.
What God hath ordered must be right;
Then find in thine own delight,
My will!

Why shouldst thou fill to-day with sorrow
About to-morrow?
My heart.
One watches all with care most true:
Doubt not that He will give thee too
Thy part.
Only be steadfast; never waver,
Nor seek earth's favor,
But rest.
Thou knowest what God's will must be
For all His creatures, so for thee,
The best."

噫去歳の冬皐月の君はプリンス、アルバード、ビクトルと共に伉儷のちぎりをむすばせ給ひてし。いかで今日「アルター」のまへに立ちてプリンスの亡骸をいだくべきかなしみのありとはしり給ふべき。噫かの死といふもの人を撰ばざるためし永遠の「ロール、コール」は何時の世にか亂れたりける。噫、「マルボロー」〳〵、その春の夢はうつゝか。

○

かいつけぬ

ひさご女

明後日なん雛祭の節句なりと心ぐせに老人のいひさわぐに、そゝのかされて、人形三ッ許とり出ぬ、ちりうちはらふそが

ふところに過し年かきて給はりし師の御歌なん見出ける

　　へたてつるいも世の中もけふにあひて
　　　ならぶやいかにうれしかるらん

げに〳〵師の御歌見るにつけ、おもひ出らるゝはしらぬむかしのこの節句なり、師と同じ車にうちのり芝へ行ことありしに櫻田、かゝりし時師櫻田門を指ざししめし給ひて其むかしかのみゆる門よりこのあたり迄血しほ雪にしるくしたゝりたるが、いと〳〵ものすごかりし、その時、われいさゝか心にかゝる事ありて赤合物に饅頭笠かぶり下郎の躰にもてなし、そこに入たちしに日頃しれる人々の手足所々にはなたれたるなど胸つぶれ、肝消ゆるやうなりしとのたまひし事ありき、今より三十三年前なりしといへば、師も二十にたらでおはしけんを、御心を〻しく、ものに動じたまはざりし事、今更のやうなりとおもふにつけ、わが手にいだき持し人形の淺ましうもおさなげなるにあきれて、そがまゝ又箱におさめぬ、その翌日人のやゝといふにおどろかされて起出しに、庭の紅梅さかりなる椿雪にうつもれ、枝たわみたるに、いまだ綿ちぎりすつるやうなるがふりにふりしきりぬ、ゑんにたゝずみてうち見るに又きのふ思ひ出し事思ひ出て

　　もの〻ふの花とちりたる櫻田の
　　　春おもほゆるけふのゆきかな

その事のよしあしおのれのよくしる所ならねど、その人々の志たゞ〳〵あはれにおもはれて

○

安政の頃しば田といへる人、佛國へ行きしに、かの國の人、わが國をあなどりて、ほこりいふやう、佛國のいと〳〵才かしこき、しるしには、人の姿其まゝにうつす器あり、(寫眞器)いかで、こゝに來しかひには、我すがたうつし給へ、とそゝのかすまゝに、其器の前にいたりぬ、この柴田てふ人、おもへらく、此國人、丈もたかく、下めにわれを見さげて、ものいふがにくきに、見る限りの物、聞かぎりの事、我國のおよばぬ事ども多し、いかでこの國の人の心、おどろかして、よき土産にせんと、かうがへて、目をとぢければ、かの國人、その器のうしろに立ちて、いざ今うつしまいらせん、目をあき給へといふに、この人おだやかにこたへて、我國にも鏡てふものありて、我姿見ん事かたからず、たゞねぶれる姿みし

事なければ、このまゝにうつし給へといひしに、佛人日本人はさても希代なる事いふものかな、とおどろき合て、この噂、彼地にたかゝりしと、かたりし人のありしまゝを

○

ある女學生、他に嫁ぎて萬おのが心のまゝに振舞英語漢語まじへ、うちかたりて、老人のうちかたぶき聞えぬさましたるを見て、われたふとし、わかごときもののしりなしとほこりしが、ある日客きたりて主人にかたりし事ありしと、かたへよりさし出さらぬ事こたへければ、主人にが〳〵敷ことにおもひ、いな〳〵なんぢのいふ事たがへりといひたしなめりしを、この女學生なりし人一ッ首うちふりかたむきて、さてはわが誤解せしありといふとうち聞、又主人たなくび打振て五階まれ四階まれ汝のしる事ならずといひしとぞ、かの聞ゐし客さこそかたはらいたくおぼえけめとかたりし人侍りしまゝを

○

うつもれたるがゆかしきものは雪ふりつもる紅梅の枝、螢とぶころの夏の小川、女の名、男もかの人こそ世にまれあめれなどいはるゝほどの人のはことによし、井桁朽たるゐの草の中なる、ものすごけれどおもむき深し、なにゝまれ、あらはなるはげににくきものなりとかたりし人侍りしかば

○

父五歳の時、我家に發句などもてあそぶ人々ありしを、かたへ聞給ひ、まねばやとてか、ある朝にはを見やり給ひて

ヤア雨で海棠の花ちらかした

とのたまひしと

母は七歳の時より夏蔭が門にて歌よむ事まなび給ひしに家の子雀の子とらへしをかなしみて

朝な〳〵にはによりくる小すゞめの
あなやとられてをしくもあるかな

親父代官にてそのくに巡廻されし留守

かへりこん父をまちつゝ夕ぐれも
よべもあさなも日をくらしけり

これらの話しうちよれば、かならずわらひぐさにし給ふなれどそを忘れぬほどに。

文學

蓼花巷記

これは半掃菴の筆の跡ぞ。半掃菴は横井孫右衞門さいひて尾州名古屋の重臣ぞ。性淳朴にして文雅を好み、殊に俳諧に長じて也有さいへり。

一もとの芭蕉五株の柳の其人の德にてらされて枯ぬ名をとゞめしもあるに、不仕合なる榎木はある僧正の號に呼れて遂に斧の怒を蒙り猶切杭堀池の名をさへ流しけむ。我劍冠の仕途に身を置きながら一ッの隱家あり。これを蓼花巷と名く。蓼花にむづかしき心はなけれど、夕日朝露の氣色心ゆくばかり其一もとのゆかりなきにもあらず。松茸さふの聲きけばと俊成卿の庭らせなつかしく、世に詫びたるさまのおかしげなれば、みづからこれが名とせり。そも此幽栖無何有の鄕にとなりて山に向ひ海に沿ひ河あり野あり、月雪花鳥四時の詠を供し時わかぬ松の夕風竹の夜雨の音までも聽くに厭はず見るに乏しからず。城市を出て遠からねど人たど杖草鞋をもて訪はむとせば、たとへ方士がまめはふみ出すとも、三輪の山もと杉立る門に迷ひて、ふせ屋のはゝ木ゝの晝狐に化され、うつの山邊の道とふべき人にもあはてふたゝび桃源に棹さすごとくならむ。たゞ梅の香も志りて思ふ事いふべき人ならば、今も壺入にたづれあたらん茅門とはしるべしとなり。

物ずきの虫はきてなけ蓼の花。

袋賛

器は入るゝ物をして己が方圓に從へむとし、袋は入るゝ物に隨て己が方圓を必とせず。實なるときは肩に餘り、虛なるときはたゝみて懷に隱る。虛實の自在をしろの一袋、壷中の天地を笑ふべし

月花の袋や形は定まらず

吊不幸文

贈六林

君きけや、鳥にあらざれば鳥の心をしらず、魚ならざれば魚の心をしらず。君愛女を失ひて貫之が涙袖を浸し長嘯のいたみ襟に滿つ。定めて知る、訪ふ人々のすこし物わきまへたるかぎりは例の天命を說き哀むでやぶらずなど强て浮世の義理の蒸籠を贈り、あるは樹木の菓手籠に長口上をもつられ添らん。いかで饅頭に涙かはらん、何ぞ栗柿に悲をまぎれん。果は出入のうばかゝが鬮を高うして貰泣さは是をしもいふにやと、たゞ鳥にして魚を吊ふ也。我も近き頃十九の愛女を先だてり。されば君が心我よくしりぬ、君又はじめて我を察すべし。我が魚にして魚をいさむ、只なげき給へく。けうも歎きあすも歎き、なげきなげきてゆく儘に歎きの森に秋ふけては、柞の色のうすきをも覺らむ。七ゝの日の法事には万行の涙千行に減じ、百ヶ日の墓參には百行やゝ十行にしてやむ。まして一周忌のかい餅は其日の空の腸は斷てども砂糖つけて最一つともいふべし。されども節の膳を並べ桃に雛の祝ひ日にはあらましかはの怨は盡きず、盆の踊の手柏子は人しれぬ胸にこたへて此かなしみは一生の病也としり給へ。されば子の親を失ひてこそ手にふれし調度目にめでし草木までも長くとゞめて損はず、是を見かれにつけて慕ふ心を忘れじとはするなれ。今君が歎くたぐひ世の倒の別なれば、書のこせし筆の跡も鬼となりて引やり捨、手なれしものも火にうちくべて兒女の愍をなゝし給ひそ。かくして早く住吉の岸なる草をもとめむにはしかず、嗚我今先達の顏して君をいさむ、君また先達の顏してながあすの身の上をかいさむべき。只あだし野の草のもとすへ定めなきこそかなしけれ。

跡の脳先へとはたが秋のそら

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

家政

女學生家政練習に就ての考案

櫻井ちか子

女子の學ぶ可き學科は男子の學ぶ可き普通學科の外に家政裁縫等の數科がありまして其又家政のうちには家事經濟も料理も洗濯も客の應接も何もかもはいつておることです是等をのこらず僅かの年月の學校で敎ふる事は迚も出來ません私も自分で女生徒を取扱ふておぼえがありますが生徒に成可くは家事の件を敎へやうとおもひて室内の掃除や食物こしらへの手傳をさせると多分の生徒は不平を鳴し學問する爲にこそ學校へ寄宿するなれ家事の稽古は自家に於てもなし得ると云ひますが成程此不平にも尤なるかどもありまして喜びて之れを爲或生徒はいつも學問の進歩がおそひです實際わづかの年月の間に諸科を學ぶのですから隨分他の學科におわれて家事の手傳をなす閑暇のなきも無理ならず且學校はどうしても普通の家族の組立とはちがひますから學校では家政を敎ゆるも理論と方法とは學び得るも之を實際に練習する事は余程六ケ敷言ふべくして行はれざる事であります此故折々女學校卒業生が妻君となられおる家に行くと隨分奇妙なる御馳走を頂戴する事もあり又不經濟なる事を見るともありますが是等を見て女學校の卒業生は妻には持れぬとか當今の女子敎育は不完全故一層敎育なき女子を娶る方利益ならん杯と無茶苦茶に女子敎育を非難する人がありますがそれは無理だとおもひます固より當今の女學校の敎育法では右等の點に於て多少非難す可き事はありますなれども此欠點があるとて女子に學問させなければ日本を進歩させる事は出來ませんから欠點を非難するよりは之を補ふやうにしなければおりません私は此欠點を補ふ爲には重に母親の注意を仰ぎたひとおもひますそれ故成可くは高等小學校を卒業する迄は家におきて朝夕家事を見習はせるのが第一です然るに或母親は私の娘は好んで學問を致ますから家の事は手傳はさせませんとじまんらしく云ふ人もあり又は私は無學ですから娘は迚も私の言ふ事は聞ませんからと云ふて只學校へさへやればよいとおもつて家政の事は少しも敎へない人もありますが是等は間違です固より學業は肝要ですから之をはげましながら日々少しづゝ家政の事を敎へなけ

ればなりません而して母の手を離れて學校寄宿させし後は毎年夏期休暇の時家に呼返へして母の手傳などさせて家政練習をさせるのが良策とおもひます固より休暇の事故餘り多くの仕事をさせるはよろしくありませんが喜び樂しみて家事の手傳をする樣に母親が工夫をなし夏期休業中は別段に種々なる御馳走を造りて料理練習の材料となし又は一家團欒の快樂の種ともなし其中自然と家政の秘密を悟らしめる樣にすることとを必要とおもひます　私も一人の娘がありまして某學校へ寄宿させておきますが所謂書生風になり家政の事にうとくなりては困るとおもひて心配しております去りとて地方に置ては好き學校もなく完全なる教育を受させるわけには行かず仕方がありませんから毎年夏期休業中に力を盡して家政の事を教へたいとおもひます何事も口で云ふは易き事なれども行ふは難きものですから私も成功を得るかどふか分りませんが出來るだけやつて見る積です最早夏期休業も近くなりますから娘子を學校へ寄宿させておきなさる母親方に御參考のために私の考をお話し申したり又何か好き御考案もあれば承りたいとおもひまして女學雜誌の紙上を拜借いたしました。

小說

黑頭巾

第四回

十八公子譯

その夜。またミルフォード村にて尤も美しと聞えたる若夫婦が結婚の式をあぐる筈なりき。風破氏は沈みがちの人なりと人毎に目されしかど、かゝる折にはいとおごそかに賑はしうふるまひて、人をして覺えず噴き出さしめんばかり、滿坐を一入浮きたゝしめしが、この性情こそ氏が尤も人に愛でらるゝところなりしなれ。今宵もこのめでたき席にては、今日終日牧師が上にあつまりし怪しき恐怖も、此席に來らるれば影ものこさで消え失するならんとて、焦躁つばかり牧師の來着を待ち居たり。されど、思ふことの違ひやすきぞ口惜しけれ。フーパー氏が入り來りし一刹那、集える人々の目に入りしは過時の葬式にて一入暗澹たる色を染めなしたるのみか。かゝるめでたき婚莚の席にはたゞ悪兆となるのみなる、例のおそろしき黑覆巾なりしかば、客人等は、かの黑縐紗の下より一條の黑雲むら／＼と立上りて、まばゆきばかり輝やける蠟燭

の光明をも立ち罩めて薄暗うおしたりしかとも思ひたりしならむ。花婿花嫁は今、牧師の前に粛然として立ちたりしが、花婿が戰く手をばにぎりしめし花嫁が氷の如き手は指の先まで打ふるえ、その亡き人かと怪まるゝばかり青ざめたる貌をあげたる時は、彼の少女は數時間前に葬られたりしかど、結婚せん爲めにとてそが新らしき墓田の中より出で來りしにはあらずやなど、口善悪しうさゝやく人もありき。アヽ、何處にもあれ、結婚鐘のゝどやかにひゞく處にてかゝる物かなしき結婚のありたらんには、いと著じるきものとなりしならん。やがてその式もはてたりしかば、フーパー氏は圍爐裏にもゆる炎の光りにもいやまして、いと温かく客人だちをもてなして、ふさぎかゝりし彼等が面を直さんと、新夫婦が幸福を祈りつゝ杯をとりあげて唇のはたに持ち添えしが、その一刹那。盃にうつる己が容貌を見たりし其の刹那。今まで他人を恐れしめたる黒覆巾はわれとわが心の裏に恐怖の念を起さしめけむ、彼はたちまち戰え慄ぎ——唇は蒼白くなり——口さへつけざりし杯の酒は花氈の上に溢れ——其身は暗き方へ飛び退りぬ。

かくてわが大地もまた黒闇々たる黒覆巾をもて掩はれぬ。

あくる日はミルフォード村中、至るところ牧師フーパー氏が黒覆巾の話しならぬはなく、その影に隱れたらん不可思議はあかされることの人々がいひのゝしる第一の料となり、かしましき婦人等が井戸端會議の種、居酒屋のあるじが客人にかたる眞先の珍話となりぬ。小兒等が學校の往來にすらかにかくとさゝやきあひ、ある物まね好きの頑悪兒は黒き古手巾もて己が面を掩ひかくし、友達を嚇して打興じたりしが、つひにはみづから恐怖の念に堪えがたくて、己れがなせし悪戯のために心を失ふばかりになりしもありき。

教會の中にても、その身のいと忙はしき人々、なべて世の事には魯莽なる人々等は、フーパー氏が何故にかゝることをなしたりけん、其ことのよしを尋ねんとて、彼の人を音づれんともなさゞりしは怪むにたらねど。これまではさゝやかなる事ありともかならず一人二人訪ひ行きて忠告をこゝろみざるとはなきのみか。彼れみづからも其人々が導くまゝに從ひて、强ひて逆らひけるともなく、毫末にてもおのれに過失ありて、他人の忠告をかけたらんには、普通の輩が何とも思はぬさゝ

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

やかなる事がらにても、いと大なる罪を犯したりけんやうに思はれてみづからせむることいと深く、ほと〳〵苦悶に堪え難きばかりなりしに。此度のことは如何にしけん。かの牧師が怪しき素振はよく人々の中に知れわたりたるにもかゝわらず、誰れ一人、黑覆中につれて親愛の情もて諫諍せんとする人もあらざりき。されど教會の人々とて、かゝることの口さがなき人々の口の端にかゝらんことをうたてく思はぬにもあらざれば、さることのなからん前に例の怪しの事を何とか處置せんと思ひしかど、ふかく胸裏の隱し居る人も、公然にいゝ出でし人々もひとしく、恐怖の念にえ堪えがたくて、互に其義務を讓りあへりし後、つひに教會の委員若干を送ることそよけれと定まりぬ。

批評

油地獄を讀む（一）（緑雨著）　透谷

刑鞭を揮ふ獄吏として、自著自評の抗難者として、義捐小說の冷罵者として正直正太夫の名を聞くこと久し。是等の冷罵抗難は正太夫を重からしめしや將た輕からしめしや、そは玆に言ふ可きところならず、余は油地獄と題する一種奇樣の小說を得たるを喜び、世評既に定まれりと告ぐる者あるにも拘らず、敢て一言を挿まんとす。

油地獄は小說評註と、大鬘とを合はせ綴ぢて附錄の如くす。小說評註は純然たる諷刺にして、當時の文豪を罵殺せんとする毒舌紙上に躍如たり。然れども其諷刺の原料として取る所の、重に文躰にありしを以て見れば、善く罵りしのみにして未だ敵を塵滅するの力あらざりしを知るに足らむ。

油地獄と大鬘とは結構を異にして想髓一なり。駒之助と貞之進其地位を代へ、其境遇を代ふれば貞之進は駒之助たるを得可く駒之助は貞之進たるを得べし。然り、駒、貞、兩主人公は微かに相異なるを認るのみ、然れども此暗合を以て著者の想像を狹しと難ずるは大早計なり、何となれば著者の全心は、廣く想像を搆へ、複雜なる社會の諸現象を映寫し出でんとにはあらで、或一種の不調子、或一種の弱性を目懸けて一散に疾驅したるなればなり。一種の不調子とは何ぞ。曰く現社界が抱有する魔毒是なり。一種の弱性とは何ぞ。過去

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

現在未來を通ずる人間の戀愛に對する弱點なり。

綠雨は巧に現社界の魔毒を寫出せり。世々艮伯は少しく不自然の傾きを示すと雖今日の社界を距る事甚だ遠しとは言ふ可らず。栗原健介は極めて的實なり、市兵衞の如き阿貞の如き個々皆な生動す。而して美彌子と駒之助に至れば照應甚だ極好。深く今日の社界を學び、其奥底に潛める毒龍を捉らへ來つて、之を公衆の眼前に斬伐せんとの志が、正太夫。

何れの社界にも魔毒あり。流星怪しく西に飛ばぬ世の來らば、淺間の嶽の火烟全く絶ゆる世ともならば社界の毒魔全く其跡を絶つ事もあるべしや。雲黑く氣重く、身蒸され心塞がれ、迷想頻に蝟集し來る、これ奇なり怪なり、然れども人間遂にこれを免かると難し。黑雲果して魔か、大氣果して毒か、肉眼の明を以て之を爭ふは詩人にあらざるなり。黑雲悉く魔なるに非ず、大氣悉く毒なるにあらず、啻黑雲に魔あり、大氣に毒ある事を難ぜんとするは實際世界を見も實世界以外を見こと能はざる非詩性論者の業として放任して可なり。

吾人は非精無心の草木と共に生活する者にあらず。慾に荒さび、情に溺れ、癡に任ずる人類の中に棲息する者あり、己れの身邊に春水の優々たるを以て樂天の本義を得たりとする詩人は知らず、齊しく情を解し同じく癡に驅られ。而して己れのみは身を挺して免れたる者の、他に對する憐憫と同情は遂に彼をして世を厭ひ、もしくは世を罵るに至らしめざるを得んや。世を厭ふものを以て世を厭ふとするは非なり。世を罵る者を以て世を罵るとするは非なり。世を厭ふ者は世を厭ふに先ちて己れを厭ふなり。世を罵る者は世を罵るに先だちて己れを罵るなり。己れを遺れて世を遺るゝを知る、己を空うして世を空うするを知る、誰れか己れを厭ふ事を知らずして眞の厭世家となり、己れを罵ることを知らずして眞の罵世家となるを得んや。

〇書法大意　（小野鵝境堂氏著）　山月子

博文館にて發兌する所、誠に其大意の名に負かず、若し一本を机上に備へば、稗補する所鮮少ならざるべし。

〇萬世之師　（金鷗館藏版）　同

是れ和漢洋の格言を集むる者、上欄には熟語の詳解あり、既に四集まで發兌せり、木版なれば誤字の憂もなかるべし、至極重寶の書なり。

孤兒之友

岡山孤兒院

此頃岡山孤兒院が報道に接す、同院は益々成長し諸部次第に整頓せりと聞く。信仰に因て創られたる家の礎は是れ主の磐なり。隱れたる力は顯れたる力より大なればなり、吾人喋々の筆を愼しみて尙其の歡欣の情は止めあへず、毎々に感謝して通信を給ふ君と其の喜びを共にし、同院各位の健康を祈りぬ。主が恩寵の下に在る各孤兒院の今や相共に濃なりて、讃美するの折を得させ給ふを謹で感謝す

北海孤兒院林君

眞き樹は地に根を深く入る、北海孤兒院は北門の屯田なり、磁針は常に之に指す。此頃君の報に接す、君曰各孤兒院は共に眞の葡萄の樹に連れりと、曩に君は震災地に於て石井十次君に會して主に因り托約され今亦震災地の途に登らるの意あり、時に小橋勝之助君も上京の志あり、二君久しく相見むとせらるゝ佳句は來る五月なるべしと、余は共の邂逅の日を竢ふ。

博愛社小橋君の近信

小橋君の東上は余の久く待所なり、同君は準備の調て主の許し給ふ日に發足すと、此時に當り余は君が身体の一層健康を保ちて其の冀望を達し給はむことを熱禱す。君が其路を執らるゝ所の地方は、姬路、明石、神戶、大坂、京都、大垣、岐阜、名古屋、岡崎、橫濱、等に立寄りて上京せられ、暫時滯京し、夫より東山道を經て北海道迄漫遊せられ、孤兒將來の農業的殖民の計畫をなさるの希望なりき、皇天冀ば愛兒が其目的の上聖旨の存せる處を成さしめ給へ、父よ願ば其の命に給ふ處を遂げさしめ給へ。

紀州に於ける本鄕定治郎君

本鄕君本月中旬所用ありて紀州和歌山に至られたり、去る十七日用を果して和歌山を去られて夜船に乘り歸途に就き給ひしが、船中にて氣分惡しくなりて遂に船を下り宿處に立戾らる。時に一女ありて妓樓に其身を賣られんとす、其は山崎エイ（廿才）にして母は故ありて發狂せしが、親族の者は此娘を金八十五圓にて賣りて其代を以て狂人に獄屋を造るの料となさむ爲なりと、本人は之を耻ち痛く忌みたりしかば本鄕君も之を見過しがたく、遂に貧に迫れる要金拾數圓を同君歸京后に送與すべきとに約し同君は羽織などを賣りて彼の女子を連れ歸京の途に就けり、同君は昨今失費多く自己の旅費すら豐ならざるに至る處其の證を貝ひて励き給ふを感謝す、君が歸京后に和歌山へ送らるゝ拾數金は豫想なきも、素より信仰に因れる君余も共に之が爲に祈禱す

右筆の畢りし時本鄕君歸京し余を訪ひ給ひぬ、同君歸路震災地に入り孤兒貧兒九名と、紀州より連れ來れる女子を併せて拾名を携へ歸京し給へり。君が今回の行は誠に偶然にあらず、殊に一人の孤兒の如き方に死に瀕せし處を幸に救養せらるゝとを得たり、又一人の女子は頗る憐むべき者にして彼は無情漢の毒手に陷らむとせし危き處を免れ得たり余は之を深く感謝す

仙臺孤兒園

同院の創立者松田順平君は曩に震災地に趣かれしが、直に備前の岡山孤兒院に至り夫より播州博愛社へも立寄らる處、名古屋に於て耳痛の患を引起し久しく名古屋の震災孤兒院に於て治療され此程大に回復したれば岡山及び播州へ出發されたり。松田君が孤兒園設立の主意の如き餘り輕々吹聽せずと云ふ、亦孤兒園をして成るべく徐々に進步を遂げんとを期し敢て急卒に流れざる樣つとめ居る、今回同君の震災地に入れるも孤兒募集の要務にあらざるべし

○北海孤兒院報告

（明治廿四年十二月廿六日ヨリ仝廿五年三月十三日マデ震災地孤兒招集中ノ分）

寄附品

宅地七百三十八坪（室蘭港本町）	北海道紋鼈	某氏
衣類四點	橫濱	星野光多
衣類六點	仝	山口元五郎
衣類拾壹點	仝	聖經女學校
衣類七點	仝	鈴木新吉
パン壹袋	仝	鈴木吉右衛門
イリ豆拾一袋	仝	豆屋梅吉
菓子壹折	仝	磯部氏
襟卷七筋	仝	磯部ミナ 林クヘ
手拭三筋	仝	岩村モト
脉止七個	仝	共立女學校有志者
ハンカチーフ數枚	仝フェリス女學校	菅野氏
手袋七個	仝フェリス女學校	平野ハマ外數名
手袋七個	仝	パラツカホーム
カード二枚	仝	仝
ハンカチーフ	仝	仝
菓子壹袋	仝	長聖道
衣類貳點	仝	笹屋易之助
衣類四點	仝	大川安吉
菓子貳袋	仝	江馬氏
衣類數點	仝	加藤ナオ取次
衣類七點	仝	小林富太郎
菓子壹袋	仙臺	渡邊タカ
人形壹個	仝	仝人
菓子壹袋	仝	眞山セイ
菓子三袋	仝	佐々文彌
羅紗蒲團表並ニ羅紗切澤山	橫濱	聖經女學校
菓子貳袋	仙臺	大内源太右衛門
ハンカチーフ及藥二袋	盛岡	無名氏

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

シャツ四枚蜜柑	花巻	内田芳雄
菓子壹袋	盛岡	村上ムツ
菓子壹袋	仝	長野マキ
團子壹重	仝	三田氏
菓子六袋	仝	美露夫人
賛染壹重	仝	長野又四郎
手袋七個	仝	昆淳一郎
菓子壹袋	仝	神金太郎
洋服壹組	仝	戸田内氏
足袋七足	仝	長野夫人
雞卵拾五個	仝	長友タヾ
餅數十切	仝	神金太郎
パン壹袋	仝	木村夫人
足袋五足	花巻	一方井タマ 仝ノブ
菓子貳袋	仝	菊地清助
雜誌六冊	仝	江繁輝助
菓子壹袋	盛岡	昆老人
菓子壹袋	仝	神原伊三郎
菓子四袋	青森	井澤榮助
綿フラネル一カマ	北海道小樽	小田敬忠
衣類數點	岐阜	基督教徒救濟事務所
衣類數十點	名古屋	基督教徒救濟事務所
毛布三枚	仝	基督教徒救濟事務所
菓子壹袋	青森	遠藤甚助
手袋七個	仝	三浦後藤伊藤三氏
シャツ七枚	仝	内海房吉
足袋二十一足 半紙六十枚 手拭十四筋	仝	中島政吉
出物入水飴七	仝	森タキ
菓子貳袋	仝	下田氏
菓子三袋	仝	小倉岩城
菓子壹袋	仝	志賀秀榮
ハンカチーフ二筋	仝	松井健吉
菓子壹袋	仝	田中善右衛門
菓子壹袋	仝	後藤夫人

菓子貳袋	青森	今正輔 仝ツ子
蜜柑一箱	仝	東奥日報社
栗七ツ及菓子壹袋	仝	三浦夫人
二子織貳反	仝	小野夫人
繪紙拾五枚	仝	磯田氏
書籍七册	仝	鎌田氏
蜜柑壹箱	仝	中島旅舍女中一同
反物一反	仝	新谷熊吉
西國立志編壹册	田子ノ浦丸	松田氏
菓子壹袋	函館	東洋堂職工一同
菓子壹袋		野口ミキ
菓子三袋	仝	西念與兵衛
衣類雜品拾點	仝	美以美教會一信徒
洋服貳組	仝	下田孝吉
女學雜誌九十八册 日本之少年拾七册 小國民九册 カード拾枚	仝	小出柳太郎
習字帖七册算盤一 馬可傳一眞理易知一 ハンカチーフ既物一 カード	仝	齋藤壬生雄
手拭七筋シャツ三枚	仝	大岡圓次郎
麻裏草履七足	仝	伊原豐次郎
衣類雜品十點 足袋靴下十二足	仝	章テル
菓子一袋	仝	松本氏
石炭酸ボンド 膏藥一貝	仝	吉田茂人
金匙拾枚	仝	矢野鏡太郎
菓子一袋	仝	小山カヨ
綿入壹枚 二子織一反	仝	寺岡重之助
藥品種々	横濱	六角謙吉
藥品種々	仙台	橋本氏

寄附金

金八圓八拾參錢五厘	横濱	海岸教會祈禱會
金五拾錢	仝	山口ヨシ
金貳拾錢	仝	小幡傳明
金五錢		岸田テル
金五拾錢		無名氏
金貳拾錢		井上アイ
金貳拾錢	東京	服部常顯
金貳拾錢	仝	野村平三
金拾錢	横濱	阿部ヲカ
金壹圓	名古屋	鈴木オ三
金壹圓	仝	稻葉與助
金參圓	仝	美濃部貞亮
金壹圓七拾五錢	沼津	沼津教會婦人會
金貳拾錢	仝	沼津教會
金四拾錢	横濱共立女學校	深尾氏
金參錢	仝共立女學校	岩崎キン
金拾錢	仝	町田ツユ
金貳拾錢	仝	成岡ミホ
金貳拾錢	仝	土井國太郎
金參圓	仝フェリス女學校	小野里ツ子
金貳圓	仝フェリス女學校	少年會員
金十錢	仝	佐々木笑受郎
金貳圓	仝	田中善助
金貳圓貳拾五錢	仝	中田新三郎
金六拾七圓七拾錢壹厘	仝	横濱慈善音樂會
金拾錢	仝	小川利八郎
金貳拾錢	東京	齋藤次郎
金參圓	大坂	加藤信成
金壹圓	東京	無名氏
金壹圓		横山久太郎
金壹圓	名古屋	月ヶ瀬鐔職
金五錢		無名氏
金參圓〇壹錢四厘	仙臺	仙臺日本基督教會
金壹圓參拾錢	仝	室賀助吉取次

金拾五錢	仙臺	橋本氏
金壹圓	盛岡	見夫人
金五圓	仝	ウ井ン氏
金貳拾錢	仝	村井キイ
金貳拾錢	仝	麻生矢厚 山本マキ
金五拾錢	仝	大田フキ
金壹圓貳拾壹錢	仝	岩手女學校生徒
金壹圓	仝	無名氏
金五拾錢	仝	山田源次郎
金五拾錢	仝	小泉サダ
金參圓	仝	盛岡婦人會
金壹圓	仝	谷河尙忠
金壹圓	仝	沖澤榮吉
金壹圓	仝	小谷野夫人
金貳圓	仝	長谷川蝶
金五拾錢	仝	脇山氏
金貳拾錢	岩手縣小烏谷	荒井慶次郎
金拾壹圓六拾六錢五厘	仝花卷	花卷有志者
金拾貳錢	盛岡	無名氏
金壹圓六拾錢	靑森	郵便電信局有志者
金五拾錢	函館	佐藤菊太郎
金五拾錢	靑森	小竹
金壹圓貳拾錢	仝	電信局有志者
金拾錢	仝	松尾萬五郎
金拾圓參拾錢	仝	中島政吉
金貳拾錢	仝	高柳楊太郎
金五拾錢	仝	關彌八郎
金貳拾錢	仝	工藤ヨ子
金壹圓	仝	祖父江銀次
金壹圓	仝	仁岸與兵衛 田中八太郎
	仝	吹上金次郎 高柳恭太郎
金五拾錢	仝	小泉鎌太郎
金五拾錢	仝	水藤富太郎
金五圓	仝	佐和正
金貳拾五錢	函館	永田太郎 仝次郎
金五拾錢	仝	篠田巳雄
金五拾錢	仝	野口ミキ
金拾錢	仝	齋藤忠藏
金拾錢	仝	長谷川櫻六
金拾錢	仝	七里爲吉
金拾錢	仝	佐藤半七
金拾錢	仝	上野善藏
金拾錢	仝	石川伊三郎
金拾錢	仝	佐野與三七
金貳拾錢	仝	菊地七五郎 山田巳助
金拾錢	仝	下田長之助
金拾錢	仝	無名氏
金參拾錢	仝	村上斧太郎
金參拾錢	仝	木多長之助
金參拾錢	仝	奥山猪三太
金貳拾錢	仝	相馬キン
金五拾錢	仝	小川カ子 仝淳
金壹圓	仝	中川邦三郎
金參拾錢	仝	無名氏
金五拾錢	仝	岩船峰次郎
金五錢	仝	伊藤リイ
金五拾錢	仝	奥山眞砂
金五錢	仝	江原ソノ
金拾錢	仝	相川ハル 仝モト
金五錢	仝	德田セン
金拾錢	仝	小笠原ノブ
金拾錢	仝	小川キヨ
金拾錢	仝	小島ヤイ
金拾錢	仝	上田常磐
金貳拾錢	仝	泰フエ 白濱キヨ
金拾錢	仝	飯島カ子
金五錢	函館	若松ハツ
金五錢	仝	蘆野ナカ
金貳拾錢	仝	章テル
金貳拾五錢	仝	白殿タカ
金參圓	仝遺愛女學校	デカルトソン氏
金貳圓	仝遺愛女學校	ハンプトン氏
金參拾錢	仝	大村ツル
金貳圓	仝	婦人矯風會慈善部
金貳拾錢	仝	岡崎ギン
金貳拾錢	仝	小泉兵次
金參圓	仝	下田孝吉

總計金百六十八圓六十七錢五厘

支出金

總計金百貳拾七圓六十六錢五厘

內譯

金七拾七圓參拾四錢參厘	旅費
金四拾參錢	端書切手
金參圓四拾錢	電信料
金參圓	寫眞料
金壹圓貳拾錢	藥料
金壹圓參拾壹錢	什器
金九拾錢	スコッチ糸廿オンス
金壹圓九拾錢	目覺時計
金貳圓四拾錢	漬物貳樽
金拾六圓七拾錢七厘	衣服類
金拾八圓五拾錢	蒲團八枚
金五拾壹圓貳厘	履物類

孤兒現在員

孤兒七名 內 男四名 女三名

明治廿五年四月

北海道有珠郡東紋鼈村百廿九番地

北海孤兒院

通信

●山梨縣通信

●山梨禁酒會總會　去る十八日正午より、公園地内望仙閣にて禁酒會總會を開き、規約並に役員撰擧、及び將來の事に付相談ありたり、當日降雨ありしにも係はらず、各地方より來會せし熱心家廿餘名にて討論の末、會長には勝格彌氏、幹事には新海榮太郎、秋山朝四郎、馬淵鶴吉、相澤房次郎、金子せん子の五氏公撰せられたり、設立以來日尚淺しと雖も、會員旣に五十名の上に至れり、而して今般津田仙氏を聘して甲府に大演說會を開きたり。

●山梨廢娼義會　も同日同所に於て、幹事、委員の相談會を開き、内部整理の方法等に關して大に論ずる所ありたり、本月の末總會を開き、まさに大改革を行はんと決せり。

●三重縣通信

●温故堂私立產科學校　いま同校の來歷をきくに、明治十六年四月いまの校長山内養順氏が、津市東町に產婆學校を設立し、同十一月立町に移轉して、名稱もいまの如く改め、校則もいろ〳〵改正をなしたるより、爾來ます〳〵盛大に趣き、今日まで養成せし產婆の數合計二千六百九十八人の多きにいたれりといふ。

●女子の躰操　女子の躰操に付きては、さま〴〵の議論あることなるが、この程度會郡長滿岡氏は、度會郡教育會に、尋常小學校の女生徒の躰操は遊戲にて可なるかてふ咨問案を與へて、これを審議せしめたり、結果いまだ分らず。

●養蠶製絲傳習場の設立　上野町大字小玉町の養蠶家奥田吉次郎氏は、このたび同町に養蠶製絲傳習場を設けて、さきに埼玉縣競進舍を卒業せられたる同氏の令孃まさ子を教師に任じ、世間の子女に養蠶または製絲を傳習せしむるよし、右に付き同場は目下生徒募集中なり。

●女斷髮師　津市には女斷髮師三名あり、うち二名は夫婦あいともに營業し、他の一名は婦一人獨立して働きおれり、評ばん反て男子よりもよし。

●熊本縣通信

熊本の女學

熊本の女學は尙ほ搖籃の中ちに在りと云々の最も適評なるを信ず、今ま銀杏城下に相並びて女子教育の任に當り居るもの四ツ、曰く熊本女學校、曰く尙絅女學校、曰く女子學舍、曰く文學精舍附屬女子學舍、其設置の年限を以てするも、永きものは五年、短きものは二年有餘の歲月に過ぎず、其の生徒の數の尙ほ未だ僅少なるを以てするも、其の教場器械の猶ほ不整頓なるを以てするも、其の教員の尙ほ不充分なるを以てするも、熊本の女學は尙ほ幼稚なりと云はざる可からず、されば又た其の教育上の經驗識見の如きも尙ほ未熟なりと云はざる可からず、固より日本全体の女子教育が尙ほ幼稚なるの今日なるも、熊本の女子教育は別けて幼き有樣なり、されど熊本の女學は希望の中に在り、世人は云ふ、熊本は頑固の地なりと、然り、熊本は實に頑固なり、彼の神風連の住せし處、今も尙ほ其の子孫の住する處、彼の保守黨の跋扈する處、されど其の頑固の處に取るべき處あり、蓋し頑固の中には質樸の分子を含み、誠實の分子を包む、故に彼の早熟にして半ば開けたるものが、生意氣に、輕薄なるが如きに似ず、却て彼の夫出陣の節は我もまた家に在りて、潔よく留守を爲さんと云へるが如き凜々しき氣象我姉妹の中に存す、蓋しこは封建時代より承け來るものにして、其の中には保守因循の分子を含めども、若し之を啓發利導して、獨り其天良を發達せしめば、希くは我國今日の女學生の大弊（讀者推し給へ）を醫すに庶幾からん歟、通信子は信ず、此の質實の天良は、獨り熊本のみならず、九州を通じて、我が姉妹が有する所のものなるとを、固より其の多少の異同はあるも、之を中國以東に比するに九州は尙ほ其の頑固なる處を存すと云はざる可からず、（是？非？そは讀者の判斷に任かす、）故に通信子以爲らく、熊本の女學は、未だ彼幾多の試練を經て成功したる（若し在りとせば）ものゝ如き盛名もあらず、未だ彼の數多の失敗を重ねて醜名を流せるものゝ如くもあらず、恰も彼の幼稚園裡に遊べる小女の、天眞にして素直なるが如く、若し其の教育の法にして誤ることなくば、愛に富みて氣高き婦人、眞情の妻君、識見ある慈母となるの希望あり、通信子今ま聊か各女學校の形勢を略記して、女學雜誌愛讀の姉妹に報ぜむと欲す、諸君、幸に以て熊本女學の將來をトするの一端となしたまはむとを、

尙絅女學校

は本と濟々黌の附屬女學校にてありしを、濟々黌變じて九州學院普通學部となりしより、其名稱を變じ、更に獨立の女學校として現はれたるなり、校長内藤儀十郎氏を始とし、主として教育の任に當らるゝは、當地紫溟會に關係ある人々にして、其の教育主義の如きも、自然保守に傾くの有樣あり、されど其の五年級以上の生徒の特志者には小學教員となるべき豫備科を授くる由にて、同校より出でゝ小學教員たる人もありと云ふ、學科は余程卑近にして、其の第一年生は尋常小學卒業以上の學力あるものとし、通じて六年を以て卒業年限とす、而して學課中の英語と手藝は別科として其志望者にのみ授くるものとなり、目下生徒八十余名、中ち二十余名は縣下各地より出で來れる姉妹にして他は皆市内の令孃等なり、今の處、校長の宅を以て寄宿舍に宛て、地方より來れる姉妹は其處に寄宿自炊するとなり、

女子學舍

此の學舍内に集り來れる四十有余の女學生は、多くは當地改進黨員の令孃等より、當地の故老野々口氏は之を監し、主として教育の任に當らる、學年は三年にして、課程は高等小學位のものなり、英語の如きは唯希望者のみに授け、主として讀書、算術、習字、裁縫、家政を教へ、能く今日の家内を料理し得るの妻君を造るを以て、目的とする由、地方より出で來る女學生は至て少なく、多くは當市の姉妹なり、

文學精舍附屬女子學舍

は、近きに大田眞理を著されたる中村六藏氏の設立に係かる女學精舍の附屬にして、同氏の夫人イチ子主として、生徒薫陶の任に當らるされど目今生徒僅かに十二名にして、未だ充分其驥足を伸ばすの時來らず、以上三校は皆市内に在り、城の東、稍々市街を離れて物靜かなる處、遙かに蘇山の煙を望みて、一校舍の屹立せるものを

熊本女學校

とす、昨日今日は、晴れ渡りたる天空に、樂しく歌ふ雲雀に和して、讃美の聲の書窓より漏れ出るが聞こふ、眼を書卷の上に曝らすの傍ら、長幼相助けて、朝は水汲みつ、炊事に忙しき姉妹、夕は帚とりて校の庭内を掃除するの姉妹、其が數は五十に余まる、此等の學生にして、市内より入校せる所のものは僅かに數名に過ぎず、他は縣下各地より、又遠く福岡、宮崎、鹿兒島等の諸縣より笈を負ひて來れる令孃等なり、而して半ばは熊本縣、半ばゝ九州各縣と云ふ割合となる、之を前三校に比するに面白き現象を見る、前三校に於ては其の學生は多くば熊本市内の人にして、縣下各地より入學せしものは僅少の數に過ぎず、他縣より來るものとては先づ一人もなき有樣なり、故に三女學校は熊本の女學校にして、熊本女學校は、其名は熊本女學校なるも、其實は九州女學校なり、こは以て其の父兄が學事に熱心するの有樣、(比較的に)及び其の學生の氣風如何を察すべし、而して更に前三校と熊本女學校との異なる所を明白に示せるは、前三校に於ては、束髮の孃君を見ると最も少なく、熊本女學校に於ては、銀杏返し、蝶々髷の令孃を見るを甚だ稀なるとなり、今ま同校の内に在りて、生徒と起臥を共にし、專ら提撕薫育の任に當らるゝは、幹事竹崎順子、教員森知勢子及増田靜子、(共に神戸女學校卒業) の三女史とす、竹崎順子は、當地に於て有名なる實學派の漢學者故竹崎先生の未亡人にして、一身を擧げて學校の事に任じ、深く生徒を愛撫し、慇ろに生徒を世話し、全校生徒の慈母たり、また外よりして教授愛養の任に當らるゝは、校長藏原惟郭氏、教員ミス、クラーク、ミス、グリスウオルド(共に米人)田中逸子(同志社女學校卒業)其他數人の男女教員とす、修學年限は五ヶ年にして、之を豫科(二ヶ年)本科(三ヶ年)とに分ち、英語及び邦語を以て女子須要の普通學科を教授し、別に高等科一ヶ年を設く、本學期より始めて設置したる邦語科は、凡て邦語を以て教授し、之を豫科一ヶ年、本科三年、通じて四ヶ年とす、入學者の年齡及び學力は、普通科一年、邦語科本科一年に入學の者を、滿十四年以上にして高等小學科卒業以上の學力を有するものとす、同校は其の誕生以來既に五年の歲月を經過し、本年始めて其の第一回卒業生を出すと云ふ、姉妹は活潑にして靜淑順良、最も深く女學雜誌を愛讀せらるゝ青春妙齡の姉妹と共に、他日家内に社會に其の眞情を注いで和氣靄然たらしむるの元質、充分存すと通信子は信ず、天下の姉妹幸に熊本に此校あるとを記臆し玉へ、此の他熊本には特別に女子の爲めに設けられたる學校なし、高等小學に在るの女子は二百七十餘名にして、男生徒の半に至らず、同校を卒業して更に高等の學科を修むるものは、甚だ稀なり、また熊本には、未だ女子に關する職業學校の設立なし、織機、製糸、裁縫等の稽古場とも云ふべきものはあれど、裁縫、手藝、簿記、速記の如き、專門の業を教ふる爲めの特別の學校なし、唯だ一ッの

產婆學校

あり、現在生徒三人、卒業生二十名にして、目下開業してあるもの二人なりと云ふ、

女報

可愛子編

●兩陛下濱離宮行啓　過る日は、天皇、皇后兩陛下御一列にて濱離宮に於て御催しの觀櫻會へ行啓あらせられたり。

●皇后陛下女子師範學校に行啓　皇后陛下は嚢に仰出されし如く、廿五日午前九時十分御出門女子高等師範學校へ行啓あらせられたり。

●皇太后陛下江の島に行啓延引　皇太后陛下には二十六日江の島に行啓あらせらるべきの處、天氣の爲め延引仰出られたり。

●皇后陛下日本美術會、日本赤十字社に行啓　皇后陛下は去廿八日午前九時三十分御出門、上野公園内櫻が岡の日本美術協會へ御立寄あらせられ、同所にて御晝餐の上、日本赤十字社總會へ行啓あらせられたり。

●婦人園遊會　高島陸軍大臣の夫人は、去る二十日各大臣及陸軍部内高等官の夫人令孃を、麴町區紀尾井町の自邸に招待して、觀櫻園遊會を催せりと。

●外務大臣夫人　去る十九日火曜日は、外務大臣夫人の對客日なるを以て、内外貴顯の夫人令孃は、午後より五時迄の間陸續同官邸を訪ひしに、夫人は一々之に接し、茶菓の饗應ありしよし、其通辯は同省試補吳啓太氏と石川某氏の夫人なりしとぞ。

●女子高等師範學校試驗入學　女子高等師範學校にては、本年三月、北海道廳及び各府縣よりの撰擧生とし入學を許せし人數は三十人にして、其の縣別左の如し、

○富山三○京都二○新潟二○長野二○福島二○群馬二○佐賀二○東京一○栃木一○福岡一○德島一○三重一○山梨一○高知一○香川一○岩手一○石川一○滋賀一○靜岡一○愛媛一○熊本一○青森一。

●東京裁縫女學校　同校は東京女子師範學校、職業女學校等の裁縫教師たりし渡邊辰五郎氏が、和洋裁縫特志者の爲に設置するものにして、主として和洋裁縫手藝を授け、傍ら修身、禮式、國語、漢文、家事、經濟、歷史、數學、習字等を教授する由。

●京濱婦人一致祈禱會　は本日午前十時、横濱市尾上町指路教會に於て開會。

●婦人會　群馬縣下の同會は、一昨年四月開會し、目下會員三十名位なりと。

●新遊廓設置の計畫　京都の新市街は疏水運河の出來後追々繁昌し、貴顯の別莊其他諸工場をも設立する有樣なれば、舊二條新地及祇園新地の乙部宮川町等の人

々は、新市街の岡崎、聖護院の兩町にて、運河沿岸の地所に一區域を立て、新遊廓を設置せん事を其筋へ出願せんと、目下同業者の人々は協議爲し居ると大坂毎日新聞に見へたり、嗚呼新市街に義人なきか、何ぞ奮起して之が反對を試みざる。

●新潟の淫風いよ〳〵甚し　と新潟新聞は慨歎せり。

●産婆卒業證書授與　島根縣邑智郡川本村外九個村聯合設置に係る私立産婆講習所に於て、本月十、十一の兩日、卒業試驗を行ひしに、講習生簡易科四十八人、内三十八人卒業、又神門郡今市町私立出雲外二郡産婆講習所にては、同十五日卒業試驗を擧行し、講習生本科六人、簡易科十六人、孰れも及第す、當日は郡長臨監し、卒業證書を授與せり。

●節婦に忠婢　世は澆季に屬し、人は輕薄に流れ、五倫五常其の何物たるを知るものなき歟の如き今日に於て、節婦忠婢の我熊本縣の名譽を擧ぐるもの左の如し

熊本縣士族江口信稱妻　高群　タダ

平素能く夫及び舅姑に事へ夫數回の難病に臥し尙ほ舅姑も共に罹病一家同時に三名の患者を生ぜしも毫も屈せず晝夜無怠看護を盡し加ふるに先婦の男女養育に意を用ひ宜く家政を整理し婚嫁以來八年の久しき志操一日の如く洵に奇特とす依て其賞として金壹圓五拾錢下賜候事

熊本市北千反畑町士族加藤貞雄大伯母加藤久米尾下婢　片岡　スエ

平素謹直に雇主に仕へ能く忠實を施し主家の生計困難の際は家事專ら一身に負擔し之を整理し主婦既に八十有余年の高齡に達し身躰老衰起居不自由其上亦六十八歲の老躰なるにも拘はらす依然忠勤怠らざる等四十六年の久しき志操一日の如く洵に奇特とす依て其賞として金二圓五十錢下賜候事

熊本市東阿彌陀寺町　津下　トキ

二代の雇主に仕へて誠實宜く家事を助け特に家庭敎育に意を用ひ二十有一年の久しき志操一日の如し洵に奇特とす仍て爲其賞金二圓五十錢下賜候事

下益城郡松井金太郎妻　中島　ミト

平素尊長に仕へて順良殊に姑罹病の際は看護怠ることなく其心意を慰め且つ藥餌の供給一身に負擔する等能く孝養を盡したる段洵に奇特とす仍て爲其賞金一圓下賜候事（九州日々新聞）。

●國民之友　第百五十二號は、立憲政治と婦人と題せる論文を載せたり。

●地方の新聞紙　廢娼の問題、女子敎育の問題を論ずる者多し、氣運の向ふ處、喜ぶべし。

外報

●朝鮮には痘痕の婦人　多しといへり、是れ種痘の法開けざる故なりとぞ。

●女子選擧權反對の意見　（倫敦四月十九日發）グラッドストーン氏は、女子選擧權運動に反對の意見を表せし雜誌を發表したり、氏は此雜誌に於て、公衆若くは女子等自身も日今頻りに主張せらるゝ改正を希望せざる旨を公言したり。

●クレマンソー夫人の離婚　佛國急進派の名士クレマンソー氏は、此程其夫人を離婚せり、聞く所によれば同夫人は米國マッサチュセット州スプリングフイルドの醫師某の娘にして、父の死後叔父某の養女となり、コンチクチカット州スタンフォードの女學校に入しが、此頃（今を去廿四年前）丁度クレマンソー氏は米國に寄寓し、同女學校の佛語敎師となりて生計を立て居しゆゑ、茲に始て孃と交際の端緒を開き、遂に思ひ思はるゝ間となりて、孃と共に紐育に赴き親戚にも計らずして結婚するに至りたる次第にて、之が爲叔父は大に怒り、其緣を絕ちて家產分配を拒絕したる程なりといふ、爾後夫婦は巴里に歸り、二十餘年琴瑟相和して風波なかりしが、數年前よりクレマンソー氏とコメデフランセーズの女優ライセンバーク女との浮名巴里に廣り、茲に離婚の沙汰に及びたるなりといふ、右に付夫人は目下米國に歸り、彼の女學校長の許に寄寓し居れるよし。

●ニューヨーク市公立小學校の婦人敎師　の總數は四千二百十八人なり、此等の敎師は皆忠實にして猥りに轉任或は辭職する者尠なく、現に十年以上勤續せる者八百四十九人、二十年以上の者五百九十八人、三十年以上の者三百八十三人、四十年以上の者五十五人、五十年以上勤續する者四人あり。

●佛國の前皇后　たりしユーゼニーの侍女は嘗て后が王位にありし時より召し使はるゝものなり。

●ロースハートゥイッヶソープ夫人　嘗て有名なる一文「今宵初夜の鐘は報ぜざるべし」と云へるをものせられたる同夫人は當今カリフヲルニア洲に住居しヲレゴン州の歷史編輯に從事せられ居る由。

●グランド將軍未亡人　は其が尊敬すべき亡夫將軍の回想記幷に夫人が自傳を含める一卷を公けにせられし爲め一万磅の收入ありたりと云ふ。

●レデーヘンリーサモルセット幷にウイラード女史　の兩女史はゴルドン孃を同伴して三月十六日シカゴ府を出立せられぬ。女史等が第一看の集會はピッツボルグにて威斯人の坑夫等を集めたる談話にてありき。終日石炭を堀出すの外何も爲すなく心情自から冷固たる坑夫も本國より來航せる一貴人が其生國威斯に彼等が殘しつる家族の狀勢幷に此新世界に航り來りたる彼等との關係などより布ひて彼等が身は決して釀酒等によりて徒らに亡びを招くなどの事ある可らざる事まで懇々といとも優しく說き聽しめられし時は粗郞野暴敢なる心情もそゞろに去にし昔を忍びしにや將に自からの責任と云ふ事を感じてにや互に雙眼を濕ほしけると云ふ。此會はそも〳〵女史が生國英吉利を出立し頃の決心に對する一の結果とこそ云べけれ斯くて三女史は當今東方に在り　近々開かれんとするポートランド幷にボストンの大會に臨むの用意を爲し居らると云ふ。

●婦人交易商會よりの出品　同會よりコロンブス大博覽會の出品はサンフランシスコもフヒラデルヤも互に共働助力して勤勉しサンフランシスコよりは王子鹽漬扁桃同地產の諸果及病者用の食品等なりと云ふ。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

品名	四月廿八日
白米(一円ニ付) 一等米	九升九合
二等米	一〇一
三等米	一〇三
四等米	一〇六
五等米	一一二
正米(一円ニ付) 美濃米	一斗三升三合
尾張米	一三一
南部米	一四六
行方米	一三二
一志米	一三一
雜穀(一円ニ付) 本貫大麥	二斗九升〇合
上州小麥	一八〇
竹林麥	一九五
樆澤大豆	一九五
青樆大豆	一九五
吟小豆	一六二
白胡麻	一一八
黒胡麻	一四〇
鹽(一円ニ付) 赤穂	三、三五(俵)
大鹽	三、四五
本齋	五、六〇
新齋	六、二〇
醤油(一円ニ付) 最上 / 極上 / 上物 / 中物 / 並物	樽分原 七四 七八 八七 一、〇八 一、三〇 一、六〇 一、八〇 二、〇〇 二、一〇 二、七〇
味噌(一円ニ付) 地製上白	六、八〇〇(百目)
同上赤	六、八〇〇
同紅赤	四、三〇〇

品名	四月廿八日
白木綿(一円ニ付) 玉鶴	三、五〇(反)
綾鶴	三、八〇
日の出鶴	四、〇五
稀柏	三、八〇
若柳	三、二二
稻岡	三、五一
見玉	三、八〇
逢菜	四、〇五
古新	三、三三
改メ	三、五五
開銘	三、七五
濱縮緬 大巾上駲	四、八〇(円)
小巾百廿目立	五、三〇
花色絹糸好(一円ニ付) 七十目附	二六、〇〇(匁)
八十目附	二七、〇〇
九十目附	二七、〇〇
百目附	二八、〇〇
同小節絹 生八十目附	四〇、〇〇(匁)
同本秩父絹 生百四十目附	四七、〇〇(匁)
六丈絹猩々紅 五十目立別仕入	五、七〇(円)
同 並	五、二〇
炭(一円ニ付) 伊豆上	四、三〇(俵)
同中	五、〇〇
同下	六、〇〇
淺上	三、六〇
丸備上	二、五〇
角備上	二、一〇
切炭	七、〇〇
土釜	八、〇〇

品名	四月廿八日
製茶(百目ニ付) 山城江州稀大頭	二、五五(円)
同稀頭	二、一〇
同大頭	一、七七
同中頭	一、五五
同中茶	一、二〇
狹山稀大頭	二、〇〇
同稀頭	一、七五
同大頭	一、五〇
同中頭	一、四〇
同中茶	一、一〇
鰹節(十貫目ニ付) 土佐夏小	二八、五〇(円)
薩摩夏小	三三、五〇
伊豆夏小	二八、五〇
駿遠夏小	二五、〇〇
房總夏小	二一、〇〇
常州夏小	一八、五〇
銚子夏小	一七、五〇
乾海苔(一百枚ニ付) 洲崎	七五(錢)
大森	七五
深川砂村	七五
大師河原	七〇
水油(一樽ニ付) 地水	六、六〇(円)
胡麻	一〇、六〇
荏油	一〇、三〇
桐油	六、〇五
冬	七、五〇
坂水	七、五三
石油(一箱ニ付) チヤスター	一、四九(円)
デボース	一、五六
ホーキ	一、六六
ロシヤ	一、六一

●女學雜誌大賣捌所○東京。東海堂○同武藏屋○同叢々堂○同重陽堂○同東京堂○同盛春堂○同解明堂○同團々社○同万字堂○横濱新聞共同發賣會社○大坂福音社○同岡島支店○京都東枝律書店○同大黒屋書店○神戸福音社○函館福音社○熊本草野書店○松江盛進堂

女學雜誌社出版書目

著者	書名	郵稅	冊數	價金
鈴木弘恭大人述	つれ〴〵草講義	二錢	一冊	八錢
鈴木弘恭大人述	文法口授	同	一冊	同十六錢
船越鼎太郎君著	產婦小兒攝生法	同二錢	一冊	金十六錢
中島俊子君著	善惡之岐	同四錢	一冊	同卅五錢
横山雅男君著	婚姻論	同四錢	一冊	同十六錢
島田三郎、植木枝盛兩君演說	廢娼演說	同二錢	一冊	同五錢
巖本善治君述	妓樓全廢	同二錢	一冊	同五錢
島田三郎、巖本善治兩君著	公娼可滅	同二錢	一冊	同四錢
農學士寺尾熊三君著	植物學	同二錢	一冊	同十二錢

下六番町六番地
女學雜誌社

通信女學第三期生新募廣告

學問隆盛の今日、女學の進歩一と方ならず、凡そ年頃の娘君にして奮發學に就かぬは最と〳〵少なく、既に一家の妻となりし方にても晩學の勉强をさ〳〵年少の人に劣らぬも多し、概して何處の婦女子も皆學問と云ふことに心掛け凡そ此心掛なきものは當今の女德に欠けしやう思ふに至りぬると明治の代の恩澤にて有がたきことと云ふべし、因りて何處にも女學校の設けあり何處の娘君も玆に入學して日々の進歩目覺しきとなるが、既に妻となり母となりて一家子女の掛念ある方々は最早家を出て通學することも出來ず又家に教師を引て教を受るも甚はだ手數なれば今日の時世に斯る御婦人のみ此儘無學に終るべきかと心配する人も少なからず、此類の御婦人は何か家に在りて獨り稽古する工夫なきか又獨學に便利の書物はなきかと屢ば問合せあり、吾社之を以て遂に意を決し、昨及一昨年一月通信女學の仕組を新設し、毎月一冊の講義録を出版して、四方晩學の婦人居ながら普通の女學を獨り學びするの便に供へたるが、其十二月に至り、一ヶ年の課業を恙がなく卒へて、快ちよく全科を卒業したるもの八百餘名あり。然るに、去年一月申込の期に後れたる人々も少なからざるを以て、本年更に講義録を再版し、改めて第三回の習讀者を募る。

教授科目左の如し。

萬國史、日本歷史、算術、簿記、理化學、生理學、動植物學、作文法文例、料理、歌詠方、女禮、和文讀本、漢文讀本、家政學、衛生、育兒、看病と合す)裁縫、圖入地理、英學。

教師は、醫學士三島通良、農學士寺尾熊三、吉田仲子、渡邊辰五郎諸氏其他重もに明治女學校の教員諸君に委頼し、專ら深切鄭寧を主意とす。

代價一冊前金三十二錢(無郵税)、半年分前金一圓八十錢、一年分前金三圓五十錢、一切前金に非れば發送せず。

明治二十五年一月廿五日第一號を發兌し、以後毎月廿五日に出版して翌一ヶ月中の科目となし、其十二月に至りて全科卒業となす。

東京麴町區下六番町六番地 **女學雜誌社**

北村紫山先生題言
山田天籟先生題言
緒方紫洲先生序文
坂井排雲先生編輯

詩文精華

既版 ●全一冊●洋裝美本 ●正價拾錢●郵税不要 ●郵劵二割增

本書は我邦名家の佳篇傑作を蒐集し毎篇丁寧に批評を加へ學者をして一讀案を拍ち快と呼び妙と叫ばしむ實に詩文選中精華の名に負かずと云ふべし今經世新報主筆北村紫山先生の題言を摘載して之を徵せん其言に曰く雄深なる者は泰山喬岳の如く奔放なる者は長江大河の如く沈鬱なる者は恠壑幽谷の如く流麗なる者は花園錦簇の如く奇抜なる者は龍吟虎嘯の如く悲壯なる者は鬼哭神泣の如く激烈なる者は撃雷閃電の如く痛快なる者は疾風迅雨の如し云々餘は類推すべし嗚呼苟も詩文に志す者一本を購求し朝夕玩味せば韓柳歐蘇蓋し亦難からざるべし

發賣元 東京下谷御徒士町貳丁目拾八番地 **濟々學館**

大賣捌所●神田團々社●日本橋長島文昌堂●神田有斐閣

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

巖本善治編

吾黨之女子教育

小形二百十七ページ
定價郵便共金拾錢

「吾黨の女子教育」成る。巖本善治君の演述又は起草に係るものを編せしものにして、本校敎育の精神、期圖、大率ね之に同じく、現今實施する所ろ亦之に異なるとなければ、此書亦用ひて「吾校の女子敎育」を代言するものと謂つべし。故に、君と計り、吾校之を版にして、世の同志に示すとす。

全篇十五章

明治女學校生徒に告ぐ……一
目下の女子敎育法……一
何をか中正の旨義と云ふ……三十
女子敎育に關する幾多の謬見……三十
女學及女子敎育……五十四
母妻論……六十四
女學に反對する者の言論……八十四
日本女學讀本の編纂……九十二
女禮と躰操……百
上躰操……百
下女禮……百五
女學校の裁縫科……百十二
塾舍に三の法あり……百二十二
武道の辨……百二十七
老母に代つて女學生へ苦情……百五十
細君内助の辨……百五十九
當今女子敎育者の胸臆……百九十七
女學普及の經綸……二百〇七

發兌元　明治女學校

東京麴町區下六番町六番地

發賣元　女學雜誌社

正札引なし

新形
○はをり紐品々
○帯留類品々
○時計紐品々
○メリヤス品々

流行

右ノ外組糸一切御好ニ應ジ精製仕
○御進物等ハ美麗ニ調進仕候

組糸老舗
日本橋區よし町
佐竹勝五兵衛

○御用ノ節ハ御報知次第參館仕候

城南評論

第二號四月廿一日發兌　毎月一回　一冊定價六錢　六冊金三十三錢

沒理想の爭に就て鷗外逍遙二先生に望む（寺山啓介）

莊學發蘊（臥雲大夢）

美とは何ぞや（新井虎南）

淨瑠璃史（寺山星川）

煉瓦家屋の防火力　工學士瀧大吉

懺悔記　鷗外漁史

紅樓夢の序詞　槐夢宿柯）耕田の

大火を詠る歌（佐々木信綱）

山者（子規子）野狐禪　永洲生）向井去來

發行所　芝區田村町六番地　**城南評論社**

平和

第二號　五月七日發兌

青年ヨ試ニ汝ノ雙眸ヲ放テ汝ノ前面ヲ視ヨ汝ニアラザレバ恐懼セズ汝ニ非ザレバ服從セザル汝ノ好敵手ガ雲ノ如ク霞ノ如ク森ノ如ク林ノ如ク横ハルヲ視ヨ汝遂ニ能ク之ニ打勝ヲ得ベキカ曰姦淫曰兇殺曰苟合曰貪婪曰盗竊曰惡慝曰詭譎曰好色曰嫉妒曰誹謗曰驕傲曰狂妄曰暴狠曰刻薄曰殘忍曰詐偽曰不忠曰不孝曰不義曰不情曰不慈曰背約曰頑梗曰罵詈曰侮辱曰賄賂曰仇恨曰醉酒曰憎惡曰偽善曰權謀曰術策此等は皆青年ノ進路ニ對陣スル強敵ナリ青年ヨ此強敵ニ當ル汝ノ武具ハ何ゾ誠ノ帶、義ノ護胸、福音ノ靴、信仰ノ盾、救濟ノ冑、聖靈ノ劔、赤心ノ祈禱ヲ把リ勇戰セヨ奮闘セヨ而テ後得タル勝利ハ則眞正ノ平和ナリ天ニナル如キ平和ナリ來レ青年ヨ「平和」ニ來レ我好デ汝ノ靴ノ紐ヲ解カン「平和」ニ讀メ我喜デ燈ヲ捧ゲン「平和」ニ結ベ我欣デ勞セン

毎月廿五日發行●一部定價五錢●十部割引四十五錢●全國無遞送税㊞郵劵代用一割增

平和第壹號　賣切

東京赤坂區表二丁目一番地　**日本バプテスマ教會青年會**

新築の校舎へ**移轉**　東京市北豐島郡王子瀧の川村未定番地　**孤女學院**

東京市麹町區下六番町六番地

發行所　**女學雜誌社**

編輯兼發行人　巖本善治

印刷人　堀口庄三

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌(第三百三十五號(明治廿五年三月十五日)遞信省認可(明治廿五年四月三十日發兌

城南評論

第二號四月廿一日發兌毎月一回 一冊定價六錢六冊金三十三錢

没理想の爭に就て鷗外逍遙二先生に望む(寺山啓介)
莊學發藴(臥雲大夢)
美とは何ぞや(新井虎南)
淨瑠璃史(寺山星川)
煉瓦家屋の防火力(工學士瀧大吉)
懺悔記(鷗外漁史)
紅樓夢の序詞(槐夢南柯)
細田の大火を詠る歌(佐々木信綱)
向井去來(永洲生)
曲者(子規子)
野狐禪

發行所 芝區田村町六番地 **城南評論社**

平和

第二號 五月七日發兌

青年ヨ試ニ汝ノ雙眸ヲ放テ汝ノ前面ヲ視ヨ汝ニアラザレバ恐懼セズ汝ニ非ザレバ服從セザル汝ノ好敵手ガ雲ノ如ク霞ノ如ク森ノ如ク林ノ如ク横ハルヲ視ヨ汝遂ニ能ク之ニ打勝ヲ得ベキカ曰姦淫曰兇殺曰苟合曰貪婪曰盜竊曰惡慝曰詭譎曰好色曰嫉妬曰誹讟曰驕傲曰狂妄曰暴狠曰刻薄曰殘忍曰詐僞曰不忠曰不孝曰不義曰不情曰不慈曰背約曰頑梗曰罵詈曰侮辱曰賄賂曰仇恨曰醉酒曰憎惡曰僞善曰權謀曰術策此等は皆青年ノ進路ニ對陣スル強敵ナリ青年ヨ此強敵ニ當ル汝ノ武具ハ何ゾ誠ノ帶、義ノ護胸、福音ノ靴、信仰ノ盾、救濟ノ冑、聖靈ノ劍、赤心ノ祈禱ヲ把リ勇戰セヨ奮闘セヨ而テ後得タル勝利ハ則眞正ノ平和ナリ天ニナル如キ平和ナリ來レ青年ヨ「平和」ニ來レ我好デ汝ノ靴ノ紐ヲ解カン「平和」ニ讀メ我喜デ燈ヲ捧ゲン「平和」ニ結ベ我欣デ勞セン

毎月廿五日發行●一部定價五錢●十部割引四十五錢●全國無遞送稅●郵劵代用一割增

平和第壹號　賣切

東京赤坂區表二丁目一番地
日本バプテスマ教會青年會

新築の校舍へ**移轉**

東京市北豐島郡王子瀧の川村未定番地
孤女學院

發行所 東京市麴町區下六番町六番地 **女學雜誌社**

編輯兼發行人 巖本善治
印刷人 堀口庄三